

## 国語

## 注意

- 1 問題は **1** から **5** までで、12 ページにわたって印刷してあります。  
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙** だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**、や。や** などそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の○の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

## 1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 軽々しい行いを戒める。
- (2) ひどい仕打ちに憤慨する。
- (3) 辛辣な言葉に傷付いた。
- (4) 偉人の墓碑銘を読む。
- (5) 傲岸不遜な態度を改める。

## 2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 彼はベンが立つので討論では負けない。
- (2) 計画の実行にアンウンが立ちこめる。
- (3) 彼は音楽の才能でシンドウと呼ばれた。
- (4) ハクチュウムのような体験であった。
- (5) 師の教えをキンカギョクジョウとする。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印のついている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

中学二年生の唯は、母親の梓と自然体験学習のため佐渡島を訪れた。トキ保護プログラムを主催する努に、トキ交流会館へと連れてこられる。そこで、努の息子である亮太たちと、元トキ保護センター長の近常の話を聞く。

「昭和五十六年に野生のトキの全羽捕獲がされて、自然界で生きるトキはいなくなりました。そして、センターで生き残った中で、日本の田園に暮らしたところのあるトキは、このキンが最後でした。もつとも、いまは十羽のトキが再び田園に暮らしているわけなんだけどね。」

そこで、またもや手を挙げたのは亮太だった。

「あのー、キンが捕獲されたときの話を聞かせてください。」

近常は苦笑している。

「お前もほんとに好きだなあ、亮太。もう何十回も聞いたんだろ？ でもまあ、ここに参加されているみなさんはご存じないでしょうから、話しましょうか。」

そうして、「最後のトキ」キンの話が始まった。

昭和四十三年、佐渡の空に舞うすべてのトキの数を簡単に数えられるようになっていた頃。

人里近い水田に、一羽のトキの幼鳥が現れた。不思議なことに、この幼鳥は人間をまったく恐れない。人がすぐ近くにいても逃げようとせず、平然と水田をつついていた。このままではカラスやテンに捕食されてしまうかもしれない、と恐れた環境庁は、地元に住む宇治金太郎に依頼して観察員になってもらった。

鳥が好きで、心優しい人物であると評判だった金太郎は、雨の日も風の日も、毎日毎日黒い雨合羽を着こんでドジョウや小魚を水田に運び、静かにこの幼いトキを見守っていた。トキはすっかり金太郎に慣れ、すぐ近くまでやってきて、その手から直接餌をもらうほどになっていた。野生のトキが人間の手から餌を食べたのは、あとにもさきにもこの幼鳥だけである。幼鳥は健やかに成長し、まぶしい新雪の広野に広げる羽はしだいに美しい朱鷺色を帯びてきた。このメスはまもなく成鳥になる。すでに捕獲済みのオスのトキとペアリングし、卵を産ませることができるようだが、と環境庁は期待を膨らませた。そして、金太郎に依頼したのだ――この人慣れしたトキの捕獲を。

こーい、こーいこーい、こーい。

いつもの田端に歩み出て、虚空に向かって呼べば、必ずあのトキは飛んできた。自分目指して、自分に会うために、一直線に飛んでくるのだ。金太郎には、ただただ、それが嬉しかった。

自分を信じてくれている。そう思えば、胸が熱かった。

まっすぐ、ひたむきに向かってくる思い。野生の世界に裏切りなど存在しない。

金太郎は迷い、悩んだ。トキを絶滅から救うために、観察員の役目を引き受けたものの、そのトキを捕えて人間の技術で増やそうなどとは想像もなかった。けれど実際、限界はもうすぐそこまで迫っていたのだ。

日本のトキは、深刻に、絶滅の危機に瀕している。もはや、一刻の猶予もなかった。

勝手なものだ、と金太郎は人間を、人間としての自分をなじった。

たくさんいるときは平然と殺しておいて、絶滅が近いとなると必死に増やそうとする。人間とは、なんて勝手な生き物なんだろう。

そして、その最後の一羽となる運命のトキを捕える役割が自分に回ってこようとは、想像もしなかった。

胸がどうしようもなく高まった。眠れない夜が続いた。

自分があのトキを捕えることは、裏切り行為なんじゃないか。

こんなにも自分を信頼してくれているあの鳥を、否応なく自由な空から引き剥がしてしまうのだ。

とうとう、その日がやってきた。

金太郎は、いつものように黒い雨合羽を着て、餌をバケツに入れ、野辺に立った。

こーい、こいこい、こーい。

朱鷺色の翼が、晴れ渡った青空をかすめて飛んできた。その瞬間が、いともたやすくやってきたのだ。

金太郎は藁の上にしゃがんで、震える手に餌を握り、そっと差し出した。トキの赤い顔が、こちらを向いている。寶石の粒のように澄んだ目が、じっとみつめている。

一步、二歩、三歩……トキが近づいてくる。胸を突き破るほど、心臓が脈を打つ。

金太郎は、翼を広げるように大きく両腕を広げた。

さあ、来い。この腕の中へ。

おれの一生をかけて、お前を守ってやるから。

そうして「最後のトキ」は、しっかりと人間の腕に抱かれたのだった。

<sup>(2)</sup> 金太郎の頬を、大粒の涙が、ひとつ、ふたつと流れ落ちた。

許して……許しておくれ。

声にならない声で、金太郎は叫んだ。

腕の中の命は、とくんととくと鼓動を打っている。その静かで美しい旋律。金太郎の鼓動とひとつになって、ふたつの身体を流れていった。

キン、と名付けられた最後のトキは、その後、佐渡の空へ還ることはなかった。

正明寺という地区の「トキの棲むビオトープ」の野辺に、梓と唯は立っていた。

晴れ渡った秋空を、水をいっぱいにたたえた鏡面のような浅沼が映し出している。彼方には山影がかすんで横たわっている。豊かに生い茂る草むらと、ところどころに立ち上がるカラマツが、ときおりそよ吹く風に揺れている。

「ここはもとと田んぼだったんけろも、長いこと放置されとったんだよね。そこをトキの餌場にしようってことで、放鳥まえには村人総出でこのあたりの草刈りや植栽をやりました。」

<sup>(3)</sup> あぜ道に集まった三十人近くの前に立って、努が説明を始めた。

「野生のトキが生きていくためには、トキの餌になるドジョウやタニシが生きていける環境をまず整えなくちゃならん。それに、長く伸びた草むらにはトキは来ないけん……あたりを見渡せる場所ねえと、あの子たちは安心して餌を食べられねえんだよね。……まあそんなわけで、草刈りもして、たっぷり栄養のある土で水路も作ったんです。」

蝶を採るような長い柄のついた網を手にして、努は用水路を指さした。

「この泥の中にどんな生物がいるか、いまからみなさんに調べてもらいます。これは、とっても重要な調査だね。なぜかっていうと、これだけいろんな生き物がいました！ って結果になったら、トキも帰ってこられるような豊かなビオトープになった、ってことが証明されるから。」

ビオトープとは、さまざまな生物が多数共生する環境空間のことを意味する。この村では、打ち捨てられていた水田の跡地を特にトキのためにビオトープとして整備したのだ。梓はあぜ道の向こう側、こんもりと小さな丘を眺めた。トキ交流会館で見たビデオ映像では、確かあのあたりから十羽のトキを放鳥したのだった。

生態調査を始めるまえに、子供たちはバケツの中に入っている生きたドジョウやタニシやサワガニを見た。都会からきた子供たちは、初めて見た

小動物に大騒ぎだ。それから網を手におっかなびつくり泥の中を探った。生まれて初めて泥というものに接して、唯は何度も足を取られそうになっている。できるだけ子供たち同士助け合わせて親は口出しをしないように、と言われていたが、梓ははらはらして何度も駆け寄りそうになった。しばらくして努が、梓の力の入った肩を軽く叩いて笑った。

「そんなに心配せんでもいいっちゃよ。いっぺん頭から泥に突っこんでみたらすぐに慣れますけん。」

ずいぶん乱暴なことを言われて、梓はむっとした。少し語気を強めて返す。

「だけど、あの子、こんなところの泥に触ったこともなければ、野生のドジョウなんて捕まえたこともないんですよ。」

努は、「ああ、その通り。」と軽くなした。

「放鳥されたトキとおんなじっちゃ。」<sup>(4)</sup>  
ときりとした。

大切に大切に、守り育てられたトキ。本物の泥にも野生のドジョウにも触れたことがないまま、野に放たれたのだ。

(原田マハ「斉唱」による)

〔注〕 テン——イタチに似た動物。

環境庁——現在の環境省のこと。

ペアリング——繁殖のために、動物をつがいにすること。

田端——田んぼの近く。

虚空——何もない空間。

田んぼだったんけろも——田んぼだったのだけれども。

〔問1〕<sup>(1)</sup> そして、金太郎に依頼したのだ——この人慣れたトキの捕獲を。とあるが、この前後の表現から読み取れる「トキ」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア はじめは金太郎を怖がっていたが、鳥好きで優しい人物であることが分かり、なつくようになった。

イ 幼鳥のときから人を恐れることなく、観察員となった金太郎の手から餌を食べるようになった。

ウ 地元に住む金太郎に世話をされるうちに、他のトキと同様に人の手からも餌を食べるようになった。

エ 佐渡で最後のトキとして生まれ、一羽だけ生息していたが、金太郎に世話されて大きくなった。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 金太郎の頬を、大粒の涙が、ひとつ、ふたつと流れ落ちた。とあるが、トキを腕に抱いたときの金太郎の心情を解答欄に当てはまる形で、四十五字以内で書け。

〔問3〕<sup>(3)</sup> あぜ道に集まった三十人近くの前に立って、努が説明を始めた。とあるが、このときの「努」の「説明」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア トキの生態や保護活動の内容を的確に説明しつつ、トキを「あの子たち」と呼んでトキへの愛情をにじませている。

イ トキを保護するための環境づくりについて苦勞を語り、村人だけで行われる保護活動への不満を漏らしている。

ウ 調査内容を説明した後にトキを放鳥するビデオ映像を見せ、子どもたちに調査の意義を分かりやすく伝えている。

エ 草刈りや生き物探しを上演しながら説明することで、子どもたちにビデオの調査方法を具体的に伝えている。

〔問4〕<sup>(4)</sup> どきりとした。とあるが、なぜ梓はこのように反応したのか、その理由として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア トキと同様に、自分もまた本物の自然に触れたことがない未熟な存在だと分かったから。

イ 唯の姿とトキが重なり、これまで唯を十分に守れていなかったのではないかと感じたから。

ウ 努の平気な態度によって、この後唯が安全に活動できるのかむしろ不安を覚え始めたから。

エ 唯を大切に守るだけでなく、新しいことを唯自身に経験させる必要性に気づかされたから。

〔問5〕 本文の表現を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 前半の近常の語りの中で、トキの外見をあえて描写せず、読者がトキの鮮やかな姿を想像できるように表現している。

イ 後半部分で、トキの姿を色彩豊かに描写することは、眼前にトキの姿を見て感動する梓の心情を比喩的に表現している。

ウ 前半の近常の語りの中で、金太郎の心情を臨場感豊かに描写し、読者が金太郎に感情移入できるように表現している。

エ 後半部分で、努の子どもたちへの言葉が敬体に統一されていることは、子どもを対等に扱う真摯な態度を表現している。

## 4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印のついている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

子どもは日常生活の中で、多くの音声言語のインプットを得ながら、その言語では、どんな音が使われ、どんな音と音とが組み合わせられているかなど、音韻システムへの気づき（これを音韻認識と呼ぶ。）を深める。そして、どんな音の組み合わせが、どんな意味を持つのかを理解する。音と意味とのマッピング<sup>\*</sup>を行うことで、子どもは長期記憶の中に語彙（心的語彙などと呼ばれる。）を蓄積していく。さらに生活の中で、言語音と一緒に文字にも徐々に触れていくことで、音と綴りとの関係も習得する。音、綴り、意味の総合マッピングは、心的語彙の量と質を向上させ、これが単語の認識、ひいては読解力に影響を及ぼしていくのである。

会話など、耳から入ってくる音声言語を処理するのに音韻認識が大切なのは理解しやすいが、音韻認識が読む時にも大切なのはなぜだろう。その理由を説明するのにいくつかのアプローチが提唱されているが、ここでは、一番よく知られている二重経路説を紹介しよう。二重経路説では、心的語彙にアクセスする方法として、視覚から入ってきた情報から直接意味にアクセスする方法（視覚符号化経路）と、いったん音韻情報に変換してから、意味にアクセスする方法（音韻符号化経路）の二つがあると考えられている。実は、二重経路説の中にもいろいろバリエーションがあるのだが、基本的な考え方を単純化すると図3-1のように表せる。

英語圏を中心に進められてきた研究によると、読む際にも、大部分の場合、この音韻符号化経路を経て心的語彙にアクセスしているという。読者の中には、文字を習いたての子どもが音読するのはわかるが、大人が黙読する際には音韻化などしていないと思う人も多いだろう。しかし、この音韻化のプロセスは、大人の場合は自動化しているので、無意識で行われているにすぎないのである。

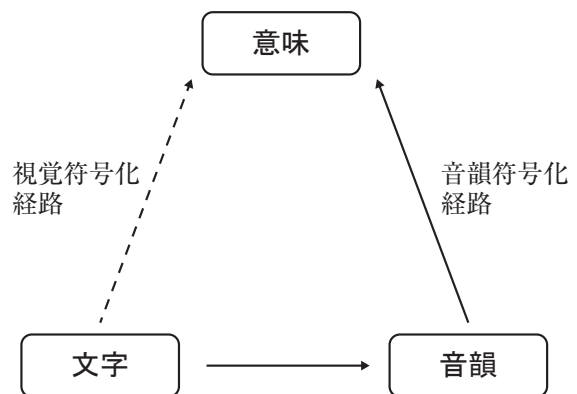


図3-1 意味へのアクセス・ルート

と仮名を併用するため、事情が少し複雑になる。<sup>2)</sup> だから読むためのステップとして、音と表記との関係を習得することが大切になってくる。

音と表記の関係は、言語によって違う。たとえば、英語のようなアルファベットを使う言語では、音素と呼ばれる単位への認識が重要である。音素という用語に馴染みがない読者でも、子音<sup>しおん</sup>とか母音<sup>ぼおん</sup>という言葉は聞いたことがあるだろう。音素は子音と母音に分かれる。つまり、子音と母音は音素の種類である。一方、日本語のひらがな・カタカナの読みではモーラ（拍）と呼ばれる音節に近い、少し大きい単位への認識が重要となる。ちなみに、音節は音素が一定の規則に従って形成された音の単位の一つで、私たち日本人話者が感覚的に一つの音の単位として感じているものだと考えてよい。

音素と音節の概念をすっきりさせるために、英語のケースをまず見てみよう。たとえば、子どもがbigとpigの二つの単語を聞いたとしよう。図3-2で示したように、bigもpigも1音節からなる単語で、それぞれオン

でも、日本語ではどうなのだろう。

アルファベットは音を表すが、漢字とは異なり、それ自体は意味を持たない。英語の読みなら音韻符号化も重要かもしれないが、漢字を使う中国語や日本語では違うのではないか。実は興味深いことに、読む際の音韻化のプロセスは、英語のようなアルファベットを使う言語だけでなく、中国語や日本語など漢字を使う言語でも、基本的にはあてはまるようなのである（ただ、日本語の場合、漢字

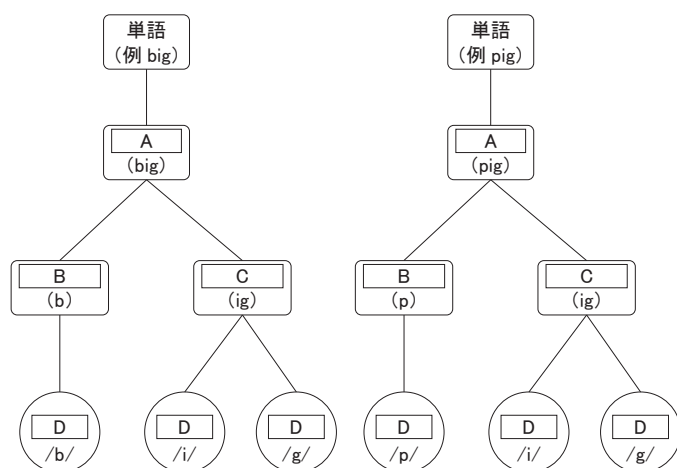


図 3-2 英単語 big と pig の音韻構造

セットと呼ばれる部分とライムと呼ばれる部分に分けられる。オンセットは、音節内の母音の前になる子音を指し、音節の残りの部分がライムだ。この big と pig は、ライムの部分が同じで、最初のオンセットの部分 /b/ と /p/ の音だけが違うことで、違う意味（単語）になっている。つまり、/b/ と /p/ の音をしつかり区別することが big と pig を識別するために重要なのである。このようにその言語で意味の違いをもたらすような最小の音の単位を音素という。

英語圏の子どもの絵本や歌にはライムを踏んでいるものが多いが、それはライムを踏んだ絵本や歌に触れることで、音素への認識を促すことができるからである。デジタル絵本・物語本で、文字にハイライトをしながら、その部分の音声を一緒に流す（読み上げる）ような機能がついているものは、子どもの音韻認識を高め、音と綴りとの関係性の理解の促進を狙っているものと考えられる。

一方、日本語の仮名（ひらがな・カタカナ）の場合はモーラ（拍）を基礎単位としている。モーラは、リズムやイントネーションなど音律的特徴に注目した時の単位で、音素の組み合わせである音節とは厳密にいうと同じではないのだが、ほぼ似たようなものと考えてよい。日本語の「ぶた」は 2 音節の単語で、「ぶ」と「た」という 2 つの仮名文字で表記される。日本語の仮名表記は、このように音節と文

字が一对一で対応しているのが基本だ。（中略）特殊音節の例外はあるものの、基本的には正書情報と音韻情報（<sup>わ</sup>）がかなり高い割合で一致しているで、日本語の仮名表記は正書深度（音と表記の不一致の度合い）が浅い表記だといわれる。

英語は音と綴りとの関係性が複雑で、正書情報と音韻情報の一致度が相対的に低いので、深い表記といわれる。英語のアルファベットは 26 文字から成るが、英語は（二重母音といわれる特殊なものも含めて）43 の音素を持つ。音素の数に比べて、文字の数が圧倒的に少ないのだ。そのため、ウルトラ技が必要となる。2 つ以上の文字で同じ音を表したり、同じ文字の組み合わせなのに違う発音を表したりなど、（ある程度のルールはあるものの）複雑である。この複雑さは、フランス語や、ギリシャ語、ラテン語、ドイツ語などからの影響を受けた英語の歴史とも深く関わっている。ちなみに、<sup>\*</sup>ヘブライ語も英語と同じく深い表記を持つ言語である。

一般に英語など深い表記を持つ言語を学ぶ子どもは、浅い表記を持つ言語を学ぶ子どもに比べて、音と表記の関係性を把握するのに時間がかかる。英語圏では、読みに問題を持つ子どもの多くが、<sup>まず</sup>、この音韻符号化のプロセスで躓いてしまうといわれている。したがって、<sup>(4)</sup>子どもが文字を見ながら、その発音を聞けるような機能のついているデジタル絵本・物語本は、読みの第一歩である音と文字との結びつきを体得するのに効果的だと期待されてきた。

一方、浅い表記を持つ言語では、音と文字との関係性の習得は比較的にスムーズに進む。日本語の場合、多くの子どもたちが、小学校へ入学する以前に音と仮名とを結びつけることができるようになっていく。しかし、日本語の表記は仮名だけではない。<sup>(5)</sup>漢字は数も多いし、日本語の漢字は複数の発音を持つものが大部分を占めるので、その習得には長い時間がかかる。視覚的にも複雑で音との結びつきも複雑な漢字の習得には、マルチメディアは強みを発揮できそうだ。

(バトラ―後藤裕子「デジタルで変わる子どもたち」による)

〔注〕マッピング―地図又は地図状の図表を作ること。

ハイライト―明るくして目立たせること。

正書―ここでは表記のこと。

ウルトラ技―ここでは変則的な方法のこと。

ヘブライ語―イスラエル国の公用語。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 音、綴り、意味の総合マッピングは、心的語彙の量と質を向上

させ、これが単語の認識、ひいては読解力に影響を及ぼしていくのである。とあるが、どういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 子どもは成長する過程で触れる言語の音韻を把握し、文字を理解していくが、文字の認識があつて初めて意味を理解することができるようになるということ。

イ 子どもは言語を習得するにあつて、文字習得によって言葉の意味を理解することはないが、音韻認識を深めることで意味を理解できるようになるということ。

ウ 子どもは言語を習得するときには、音韻認識を深め、音と意味とのつながりを理解していき、その上で文字とそれらとの組み合わせを理解していくということ。

エ 子どもが言語を習得する際に、心的語彙を充実させることによって音韻認識を深めていき、それから言語音と文字の関わり方への理解を深めていくということ。

〔問2〕<sup>(2)</sup> だから読むためのステップとして、音と表記との関係を習得することが大切になってくる。とあるが、このように言えるのはなぜか。

その理由として最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 大人になると意味の認識に音声は不要だが、子どもの頃は、基本的に文字情報と音声を一緒に理解することで、語彙は増えるから。

イ 読むときには、多くの場合年齢や言語の種類にかかわらず、文字情報をいったんは音声に変換し、それから意味を理解しているから。

ウ 漢字と仮名を使う日本語では、文字情報を音声に変換して意味を理解するだけでなく、文字から直接意味を認識することがあるから。

エ 音を表す文字を用いる言語では、文字を音声に変えて認識し、文字に意味が含まれる言語の場合は、そのまま意味を認識するから。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 図3-2で示したように、とあるが、本文に照らし合わせた場合、

図3-2の空欄部A～Dに入る語の組み合わせとして最も適切なものは次のうちではどれか。

|   |   |    |   |       |   |       |   |    |
|---|---|----|---|-------|---|-------|---|----|
| ア | A | 音素 | B | ライム   | C | オンセット | D | 音節 |
| イ | A | 音節 | B | ライム   | C | オンセット | D | 音素 |
| ウ | A | 音素 | B | オンセット | C | ライム   | D | 音節 |
| エ | A | 音節 | B | オンセット | C | ライム   | D | 音素 |

〔問4〕<sup>(4)</sup> 子どもが文字を見ながら、その発音を聞けるような機能のついて

いるデジタル絵本・物語本は、読みの第一歩である音と文字との結びつきを体得するのに効果的だと期待されてきた。とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次のうちから選べ。

ア アルファベットを用いた言語は、音と表記の関係性が複雑で分かりづらいため、文字を見ながら同時に音声聞けるデジタル絵本・物語本は、音と表記の関係を理解することを助けるから。

イ 文字より音素の数が多い英語では、文字と音素の関係性が複雑なため、イラストによって文字と音素の関係を補うデジタル絵本・物語本は、音と表記との関係を理解することを助けるから。

ウ 音と表記が比較的一致する英語などの言語は、子どもが音と表記の関係を把握しづらいため、音声を聞くことができるデジタル絵本・物語本は、音と表記の関係を理解することを助けるから。

エ 様々な言語の影響を受けた英語は、音と綴りの関係が一对一で対応しているため、音声を聞きながら文字が読めるデジタル絵本・物語本は、音と表記との関係を理解することを助けるから。

〔問5〕<sup>(5)</sup> 漢字は数も多いし、日本語の漢字は複数の発音を持つものが大部

分を占めるので、その習得には長い時間がかかる。とあるが、複数の発音を持つ漢字の習得にはどのような学習方法が有効だとあなたは考えるか。本文の内容を踏まえ、二百四十字以内で書け。なお、  
、や。や「などのほか、書き出しや改行の際の空欄もそれぞれ字数に数えよ。

## 5

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印のついている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

平安時代から中世にかけての物語とか説話とかは、作者や書き手が誰だかわからないのが普通です。和歌でも「よみ人しらず」の歌は、『古今和歌集』で全体の四割を超え、『万葉集』では、四千五百余首中、約半分が、原則として作者を記さない巻に収められています。

それだけではありません。<sup>(1)</sup> 古代の和歌には、類句・類歌という現象があります。例えば、『万葉集』には、「妹は心に乗りにけるかも」（愛しい女が、心の上に乗ってしまったように忘れられない。）を下句として共有し、上句に様々な序詞を置いて、その心のさまを表現する歌々が、七世紀半ばの「初期万葉」の時代から、八世紀の奈良時代に至るまで、たくさん見られます。

東人の荷前の箱の荷の緒にも妹は心に乗りにけるかも

（巻二・二〇〇、久米禪師）

東国の民が献上する初穂を入れた箱の紐が嚴重にくくられているように……

春さればしだり柳のとををにも妹は心に乗りにけるかも

（巻十・一八九六、柿本人麻呂歌集）

春になると芽吹いてしだれ柳の枝がたわなに垂れるように……

A 宇治川の瀬々のしき波しくしくに妹は心に乗りにけるかも

（巻十一・二四二七、同）

宇治川の瀬のあちこちに重なって立つ波のようにしきりに……

B 大船に葦荷刈り積みしみにも妹は心に乗りにけるかも

（巻十一・二七四八）

大きな船に葦の荷を刈り積み、それがたっぷりであるように……

C 駅路に引き舟渡し直乗り<sup>ただ</sup>に妹は心に乗りにけるかも

（巻十一・二七四九）

早馬が通る道から、綱を引いて川を渡る船を渡すように一直線に……

D いざりする海人の梶の音ゆくらかに妹は心に乗りにけるかも

（巻十二・三一七四）

漁をする海人の船を漕ぐ梶の音がゆっくりしているように……

今ならば、すぐ「盗作」の聲が上がりそうですが、二七四八と二七四九が連続して載せられているように、似た歌があるのは全然悪いことは考えられていません。それどころか、作者不明の歌を一言一句変えずに自分の歌とした例がいくつもあります。だいたい編者とされる大伴家持の歌からして、『万葉集』の他の歌との類句・類歌関係が多く見られます。そのため、近代に入ってから、家持の歌の評価は大変低くなってしまったのですが、それを模倣と呼ぶより、私たちと万葉びとの間に、歌というものの帰属に関して、大きな違いがあると考えるべきではないでしょうか。

和歌は、「一人称の文学」などと言われるように、自分の心情を表現するもので、『万葉集』には、平安時代以後の和歌と比較しても、ワレとい

う言葉の使用率がより高いことが知られています。しかしその表現は、むしろ多数に共有されるもののなのです。

鈴木日出男氏は、そうした類歌性は、原始的な村落をしのばせるような没個性的な言葉ではあるが、しかし単に原始共同体の名残などと理解されるべきではないと言います。万葉和歌より古いはずの記紀歌謡には、そうした類歌性は見られないし、万葉和歌との間にも歌詞の共通性は認められない。類歌は、誰しもが詠歌の営為に参加できるための共通の形式であり、人々が自在に歌を詠むための表現形式なのだろう。そのために『万葉集』では、時代が下るほどにかえって類歌性が濃密になってゆく、と説きます。

なるほど、「妹は心に乗りけるかも」などと下句が決まっていれば、誰でも簡単に和歌が作れるでしょう。例えば、「心に乗る」さまがずつしりと重いと表現するのならば、「街道に唸るダンブの過積載」とか、それらしい上句をアレンジすれば、それなりに自分オリジナルの和歌が出来る仕掛けです。

鈴木氏は、記紀歌謡から万葉和歌へ、歌謡を支える集団から和歌を詠む個へ、という従来の見方を疑問視します。記紀歌謡が宮廷儀礼と結びついて整備される時期と、万葉和歌が宮廷社会を中心に急速に発達する時期とは重なっているのだから、和歌が歌謡を駆逐しながら成立したとみるだけでは正しくない、と言うのです。

日本の詩歌では、集団と個とが、徹底的に対立し合うのではなく、どこかで連続性を保ちながら緊張関係を結んでおり、集団に関わるることによって、かえって個が鮮明になる。時代とともに個の要素ばかりが強まってゆくのではなく、歌会や歌合が発達し、あるいは連歌や俳諧（連句）が新しい詩形として考案されるように、絶えず集団性との関わりのなかで、緊張的な詩性が保たれてきた、という鈴木氏の見通しは魅力的です。

正岡子規が、「歌よみに与ふる書」（一八九八）で、古典和歌が表現を共

有し、伝統に則ることを、先人の残りかすを舐めるようなものと非難し、それが受け入れられて、近代では個の要素や独自性ばかりが重視されるようになったのですが——子規は『古今集』を下らないと攻撃し、『万葉集』尊重を説いたのですが、その類型性には注意しませんでした——、その価値観で古典和歌を裁断するのは、もう誤りと言っているでしょう。考えてみれば、心情表現も、受け手に共感されて初めて意味を持つのですから、作り手個人だけでなく、受け手を含めた集団・社会を勘定に入れて考えるのは当然なのです。

（鉄野昌弘「歌謡の仕組み」による）

〔注〕よみ人しらず——和歌を詠んだ人が誰か分からないこと。

序詞——和歌などで、ある語句を導き出すために、その前に置かれる語句。

葦荷——刈り取った葦を束ねた積み荷。葦は水辺に生える草のこと。

駅路——役人や公用の旅行者のための馬が通る道。

鈴木日出男——国文学の研究者。

記紀歌謡——『古事記』『日本書紀』に記載された詩歌。

営為——営み・行為。

歌会——複数人で和歌を詠み合う会。

歌合——複数人で和歌の優劣を競い合う会。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 古代の和歌には、類句・類歌という現象があります。とあるが、「類句・類歌という現象」の特徴として、最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 他者の和歌の表現を用いるためには、和歌に関する豊かな教養が必要となるので、和歌が限られた人々の文化になるという特徴。

イ 人々が、共通する言葉を含んだ和歌を作ることによって、他者の和歌を自分の歌とすることに抵抗感がなくなるという特徴。

ウ 共通する表現を使った上で、和歌の一部を創作することによって、誰でも簡単かつ自由に和歌を作ることができるという特徴。

エ はじめに独創的な言葉を創作し、その後、共通の表現を和歌で使用することで、豊かな心情を簡単に表現できるという特徴。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 認められない。のここでの意味として最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 容認されない。

イ 確認されない。

ウ 公認されない。

エ 承認されない。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 和歌が歌謡を駆逐しながら成立したとみるだけでは正しくない、と鈴木氏が述べるのはなぜか。最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 記紀歌謡も万葉和歌も、宮廷内で発展する時期は重なっており、集団と個との徹底的な対立が同じ時代に起こっていたはずだから。

イ 記紀歌謡も万葉和歌も、宮廷内で発展する時期は重なっており、互いに影響しあって宮廷の制度を支えてきたとみるべきだから。

ウ 記紀歌謡も万葉和歌も、宮廷内で発展する時期は重なっており、宮廷の発展とともにむしろ集団の要素が強くなると考えるべきだから。

エ 記紀歌謡も万葉和歌も、宮廷内で発展する時期は重なっており、集団から個が独立する形で和歌が発達したとは言いきれないから。

〔問4〕<sup>(4)</sup> その価値観で古典和歌を裁断するのは、もう誤りと言っていいでしょう。とあるが、その価値観とはなにか。解答欄に当てはまる形で本文中から十字以内で抜き出せ。

〔問5〕 その心のさまを表現する歌々が、七世紀半ばの「初期万葉」の時代から、八世紀の奈良時代に至るまで、たくさん見られます。とあるが、本文中に引用された和歌〔A〕～〔D〕のうち、和歌の作者の愛する女性の存在が、厚みと重みで表現されているものとして、最も適切なものを選べ。なお、解答の際には、和歌〔A〕～〔D〕の現代語訳を参考にする。

4  
1

国

五  
日